

THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2025年10月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター（真宗大谷派）

〒113-0034 東京都文京区湯島2-19-11

TEL.03-3814-4900 FAX.03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <https://www.shinran-bc.higashihonganji.or.jp/>

Facebook <https://www.facebook.com/shinran.bc>

X(旧Twitter) https://x.com/shinran_bc

2025.10

第91号

古い時空について

親鸞仏教センター研究員 大胡 高輝

年々、あれこれと思い悩むことが増えて、精神が過敏さを増す一方であるとともに、少しずつ、生命が弱まってきているという感触がある。

さまざまなものを受けつけなくなってゆくなかで、しかし、たとえば次に引く折口信夫の歌のような、古い時空に根ざした言葉にふれるときには、ふだん見失っている自分自身の呼吸の仕方が、ふと戻ってくる。

息づきて

かそけかりけり。

夏ふかき 山の木蓮子に、

朱さす 見れば

（『春のことぶれ』）

古い時空の蔵する、ある種のつかれと繊細さが、どこか寂しげな面差しで生命をいたわることはあるのだと思われる。

いまの世にあって、私たちはみな、充実した生を生きさせられている、といえるのではないか。社会順応的であれ逸脱的であれ、持続的であれ瞬間的であれ、精神的であれ肉体的であれ、あらゆる質の充実が、政治的・経済的な利益循環の構造に取り込まれて、その資源として需要され、激しく消費されつつあるように見受けられる。

そして、誰もが未来に価値を生み出すよう強いられている世にあっては、別様の未来の形を思い

描くこともまた一つの充実となるほかないのだとすれば、私たちの生命の息づかいは、むしろ、ひたすら過去を思い出しつつけるという無為によってのみ、かろうじて保たれうるのではないか。

しかし、無為ではあるにしても、その無為が時間軸上の一点としての過去ではなく、「もはや二度と呼び返すすべのない既定性と、一種魂の故郷の味わいをもった神話的なアウラを帯び、通常の記憶ないし思い出を絶してそれらとは別の秩序に属する〈インメモリアル〉な時の後光をなほどこかうけながら、集団や個人の心性のうちに生きまたよみがえる」ような「〈むかし〉」（坂部恵『かたり』、傍点原著者）を思い出しつつけるものであるなら、それは、「何に向かっていくということもなく、ただあるということ自体が一つの異議であるような、そういう行き方」（菅野覚明『神道の逆襲』）を開くものとなると思われる。

「ただ、石の地藏のようにそこにあるということ」（同）。古い時空、あるいは〈むかし〉の面影を宿した、無為でありまたそれゆえに無償でもあるそのあり方から語りだされる言葉が、私たちの生命をいたわりながら、他方同時に、人々の生を収奪してゆくいまの世をその背後から虚を衝く形でたじろがせる光景を、最近、「一生を棒にふつて人生に関与せよ」（高村光太郎「冬の言葉」）という叫びとともに、ときどき幻想している。

「いなかのひとびと」 ということ

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



当センター所長・本多弘之による連続講座「親鸞思想の解明」では、2023年1月より「本願力回向の行信—『一念多念文意』を読み解く—」と題して、親鸞の『一念多念文意』を拝読し、今年(2025年)の3月に、第23回をもって読了した。ここでは、その最終回の一部を紹介する。

(親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一)

『一念多念文意』の最後、跋文^{ばつぶん}に、「いなかのひとびと^{もんど}の、文字のこころ^{もんじ}もしらず、あさましき、愚痴^{ぐち}きわまりなきゆえに、やすくこころえさせんとて、おなじことを、とりかえしとりかえしかきつけたり。こころあらんひとと、おかしくおもうべし。あざけりをなすべし。しかれども、ひとのそしりをかえりみず、ひとすじにおろかなるひとびとを、こころえやすからんとてしるせるなり」(『真宗聖典』初版546頁、第二版669頁、東本願寺出版)と、こう書いてくださっている。『唯信鈔文意』でも同じように書いておられる。こういうことをなぜ記したのか、これはいったいどういう意図なのか。

つまりこれは、親鸞がいなかの人々を自分の外に見て、お前ら愚かな人々よと、こういうふう呼びかけている言葉ではないはずです。親鸞の外側にいなかの人がいるのではなくて、いなかの人々と共に如来の教えを聞いていくということが成り立った人間と、どうしても如来の教えに従えない人間とが、親鸞の上に重なっていて、愚かな凡夫として生きるということと、本願力を本当に信じて本願を証明するようになった、信の一念に立った人間とが、身としては一つである。懺悔するしかないような愚かな身であると同時に、本願を本当に証明する身として喜びが満ちてくる。

仮名聖教は、極限のところを何とか表現したい。何とか表現したいのだけれど、分からない人々がいる。分からない人々の中に、「いなかのひとびと」と言っている中に、愚禿親鸞も入っているのではないか。「いなかのひとびと」と書いている時には、如来からの呼びかけを聞いている筆^{ふで}なのです。親鸞が書きながらも、親鸞を超えた如来からの声である。この仮名聖教を書くについて、親鸞はいなかの人々の身になって、いなかの人々と共に考えようとなさって、そのために取り返し巻き返し、語って伝えていこうとする努力をしてくださっている。それが意味で如来の命令だと。こういう思いで書き記してきて、最後の言葉は、何と言いますか、言葉はわるいのですが、如来が親鸞に乗りうつって、如来からの言葉を記した、そう思って読んだら分かる言葉ではないかと思うのです。

親鸞の言葉だとすると、親鸞の立場からこんな言葉が出てくるということは了解不可能ですよ。自分の信心が本当にいなかの人々に伝わることで、本願が成就するということを見てきているわけだから。その人々を馬鹿にするようなことを書いて、そんなことで仮名聖教を書いたのだろうか、そんなわけなからうと、そう思わずにはおれない。それぐらい親鸞聖人のお書きくださった仮名聖教は了解が難しい。つまり、親鸞自身が、分けてはならないところを分けるがごとくに書いているけれども、本当は分けてはいけないところを語っておられる。だからそこが、仮名聖教といえども非常に難しい。本当に親鸞を分かろうとすると、本当に分かりにくい。それはやはり、仏者を生きておられるからだと思います。

ケアの倫理からみた 人間観

同志社大学大学院グローバル・スタディーズ
研究科教授 岡野 八代



2025年2月13日、筆者主宰の「宗教と教育」研究会の一環として、岡野八代氏をお招きした研究会を開催した。筆者が研究対象とする宗教教育は、公教育の枠組みのなかにありながら、公教育が前提としているものとは異なる、オルタナティブな人間観・社会観からその実践を出発させており、その現代的な意義を明らかにするにあたって、ケアという営みが重要な視座を提供すると考えられる。そこで今回は、「ケアの倫理」研究の第一人者である岡野氏に、ケアの地平からどのような人間観・社会観が構想されるのかをご講義いただいた。論点は多岐にわたったが、以下、特に印象的なものを紹介する。

(親鸞仏教センター研究員 徳田 安津樹)

問いの出発点としての家父長制と暴力

きわめて印象深かったのは、本論に入る前に、岡野氏が、時間をかけて丹念に、家父長制とその暴力性について論じられた点である。岡野氏によれば、西洋の哲学および政治思想において、男性家長のみが平等で自由な公共空間に参加できる理性的な人間と見なされ、その背後で、女性たちが、支配関係のなかで非人間化され、暴力にさらされてきた。そしてケアの倫理は、このような犠牲を肯定する秩序が残り続けているということ、その不正義に対する抵抗から立ち上がった考え方である。このような視点から、岡野氏は、ケアの倫理を、政治からの女性排除を問い直すとともに、人間性や社会性を根底からとらえ直す試みとして提起された。

「お母さんの子どもである」からの平等論

講義では、岡野氏はケアが非人間的なものではなく、「人類的な」活動であり、人間性の核心へと立ち返るものであることを強調された。この点は質疑でも取り上げられ、ケアの倫理は、ケア的

なコミュニケーションが成り立ちにくい人々についてもその思考が及ぶのかという、ケアの倫理の普遍性について確認する問いが提示された。これに対して岡野氏は、政治学者キティの言葉「みな、誰かお母さんの子ども」を引きながら、お母さんから見れば、人間から産まれた子どもはすべて人間であるのであって、理性を持っているか、明確なコミュニケーションをとれるかどうかは関係がないと答えられた。「人間から産まれたものはすべて人間である」という命題は、研究会全体のなかでもとりわけ力強いメッセージとして、参加者の記憶に刻まれたものと思われる。

悪とはケアレスである

岡野氏は、ケアの倫理に基づく悪についての考え方を議論され、悪とはケアレス、つまり社会的にケアが欠如していることであると論じ、それは個人が犯した法的な罪とは区別されるもので、いかなる人も放置しない、ケアに満ちた社会を作る責任がわれわれにあることも示された。また、ケアレスな社会から脱却するための、具体的な提案も紹介された。

研究会を経て自覚させられたのは、宗教教育にケアという視座を導入するためには、この言葉が表面的に持つ柔らかなイメージの位相に留まることなく、この言葉が抱えている苛烈な背景とも向き合わなければならない、ということである。そしてそれを本当に実行するためには、教育者一人ひとりが、暴力や悪の問題に応答する責任ある立場となりながら、教育を、それを支える社会構造も含めて根本的に問い直しつつ、別のあり方を具体的に構想していかなければならないだろう。

第9回 清沢満之研究交流会

清沢満之「精神主義」 を再考する

—— 研究交流会の成果と課題！ ——

清沢満之研究交流会は「異領域間の対話」をめざして2015年に始まり、これまでに8回開催された。その成果は『現代と親鸞』などで発信されてきたが、研究交流会全体の総括は十分に行われてこなかった。これまでの交流会を通じて何が見え、何が課題として残されたのか。近代仏教研究が大きく転換しつつある今、交流会の歩みを整理する意義は大きい。そこで2025年2月27日に催した今回の交流会では、「精神主義」を検討した第1・2回の議論をふまえ、当時登壇した3名の研究者に再登壇いただき、議論を振り返った。

清沢研究あるいは「精神主義」という対話の場所

名和 達宣（真宗大谷派教学研究所所員）

本会は、異なる専門領域の研究者が清沢思想を媒介に対話する場として構想された。単なる学術発表にとどまらず、現代との接点を探る場とし、開催場所にも求道会館を選んだ。発表者の研究では『臘扇記』を軸に、精神主義を内面的信仰論にとどめず、倫理的責任を伴う思想構造として再考した。また、対話から生まれた「敬意ある批判」や「部分否定」の視点が清沢理解の鍵となった。こうした経験は教学研究にも影響を与えている。今後は清沢研究に限定せず、親鸞教学に立ち返りつつ、対話する新たな場の創出が求められる。清沢研究は思索と対話を開く出発点であった。

清沢満之「精神主義」研究の課題

近藤俊太郎（本願寺史料研究所研究員）

本交流会への参加は、自著『天皇制国家と「精神主義」』との関連からも重要と感じた。2000年代以降、清沢研究は近代仏教研究の柱となり、発表者もその流れで精神主義を清沢と門下による宗教運動として捉えてきた。その特徴は、信仰の確立による現実肯



定にあり、それが天皇制国家の内面統制と結びつく危険を孕む点を指摘した。また、『清沢満之全集』の編纂が哲学中心に偏り、宗教的側面が軽視されている問題も検討した。清沢を社会的・歴史的文脈の中で再読することが現代における意義だと考える。

清沢満之研究の構想力

繁田 真爾（親鸞仏教センター嘱託研究員）

博士課程時に岩波版全集に出会ったことを契機に、思想史の立場から精神主義とその歴史的性格を考察してきた。重要論点として「テキスト問題」「思想の構造」「歴史的な性格」の3点を挙げた。特に、精神主義が天皇制国家に内面から従属する主体形成と関わる可能性に注目し、近藤氏の問題提起に影響を受けた。発表者は「部分否定」の構造に注目し、清沢が近代的二元論に基づきながらも単純な一元化に至らず、有限者のリアリズムを追究した点に思想的特質を見出した。宗教史と歴史学を架橋し、近代仏教思想を再構築するうえで、清沢研究の意義は今後も大きいと確信している。

コメント 宮部 峻（親鸞仏教センター嘱託研究員）

岩田 文昭（大阪教育大学名誉教授）

若手研究者で清沢満之を扱う者はほとんどいない現状がある。若手は儀礼研究、メディア研究、ジェンダー研究など成果の出やすい周辺領域に向かう傾向があるが、これらが近代仏教研究の中心になり得るかは疑問である。あらためて清沢に注目する意義は大きい。

また、第1回・第2回では規範的議論が積極的に行われていたが、第3回以降はアカデミックな議論に傾きがちではなかったか。次世代への継承を意識し、第3回以降の議論を規範的レベルで再考する必要がある。

戦後日本史学における (被差別) 身分研究の流れ

神戸大学名誉教授 高橋 昌明



2025年3月25日、歴史学者の高橋昌明氏をお迎えして、「親鸞と中世被差別民に関する研究会」を開催した。親鸞が生きた時代である中世、その身分制とは一体どういうものなのか。そもそも身分とは何か。それはいかにして成り立つのか。身分制全体を包括的にとらえ、さらに、全体との関連の中で、中世の被差別民の位置づけについて、論じていただいた。ここでは、その一端を報告する。

(親鸞仏教センター嘱託研究員 菊池 弘宣)

高橋昌明氏は、被差別身分研究も歴史学の一部であると述べ、背景として日本の歴史学が戦後どのように進んでいったのか、その概観を示された。その歩みの変遷の中で、社会の変革や差別を撃つということのリアリティー、問題関心が次第に後退していった。そして、身分制研究で身分を全体として論じるということが、現在ではあまりなされなくなってきた。歴史学はどこまで被差別身分の問題に迫り得たのか。ただ、今でもそういう問いと向き合う、細やかな被差別身分研究は行われている、と話された。

次に、「被差別身分研究の主要な仕事」として、特に、黒田俊雄氏と大山喬平氏の研究を取り上げられた。黒田氏が1972年、「中世の身分制と卑賤観念」(『黒田俊雄著作集』第6巻 法蔵館)という論文を発表し、中世身分制の全体像を把握することを試みた。そして、中世身分制の全体の中で被差別身分を位置づけ、なぜそれが被差別身分とされたのかを論じた。そういう手法を初めて提唱した。黒田氏は、中世の被差別民の基本に「非人」(社会秩序から脱落・排除・疎外された孤絶の個人)を据えて、「権門体制」の諸身分とは異なる「身分外の身分」と位置づけた。

さらに、大山氏が1976年、「中世の身分制と国家」(『日本中世農村史の研究』岩波書店)とい

う論文を発表し、前近代社会において身分が成立する根拠を問い尋ね、その根拠を、自己編成を遂げた集団の内部規範に求めた。つまり、集団というものは、そもそも自律した性格を持っていて、その集団の自己維持のために、その内部で人々を適切に配置し区別する。そのようにして出来上がるのが、身分の元々の在り方であるという説を述べた。その黒田氏と大山氏の意見の違いは、人間における自律の主体をどこに見るのかにある。その主体を黒田氏は「個人」と理解し、大山氏は「集団」、そしてその最小単位である「イヘ」と理解している、と話された。

そして、高橋昌明氏ご自身は、中世の身分の本質を、大山氏の説にならって、「身分とは、社会ごとに前近代諸社会に存在する各種自律的集団・社会組織の存立とかかわって、その内部に形成される多少とも永続的な人間の類別——不必要な部分の集団外への放逐も含めた——であり、類別は上・下に序列化されることが一般的である。類別、序列の永続化・固定化に一定の役割を果たすものが、それら諸集団(組織)の内部を律する諸規範(掟・法)である」(高橋昌明「中世の身分制」『中世史の理論と方法』校倉書房)と示された。つまり、身分というものは、元々、その人の所属集団それ自身によって決定される。さらに、「より上位身分への上昇の裏付けとなるものは、主として彼の実力だった」と示され、要するに、中世の身分制社会とは、人に勝つための実力がものをいう「自力救済社会」とであると、話された。

身分というものは、そもそも本人が所属する集団自身の内側に成立根拠がある(報告者取意)という説が、新鮮かつ印象深かった。ただ、その基礎単位が「イヘ」であるということから、「家」に関する支配・従属の根深い縛り等、そこに苦悩も生じてくるのではないかと感じた次第である。

「摂取心光常照護」というのは、信心をえたる人をば無碍光仏の心光、つねにてらしまもりたまうゆえに、無明のやみはれ、生死のながきよ、すでにあかつきになりぬとしるべしとなり。「已能雖破無明闇」というのは、このころなり。信心をうればあかつきになるがごとしとしるべし。「貪愛瞋憎之雲霧 常覆真實信心天」というのは、われらが貪愛瞋憎をくもきりにたとえて、つねに信心の天におおえるなりとしるべし。「譬如日月覆雲霧 雲霧之下明無闇」というのは、日月のくもきりにおおわれるれども、やみはれて、くもきりのしたあきらかなるがごとく、貪愛瞋憎のくもきりに信心はおおわれるれども、往生にさわりあるべからずとしるべしとなり。

《語註》

無碍光仏…阿弥陀仏のはたらきをあらわす名の一つ。ありとあらゆる世界を照らし、煩惱・罪惡にさまたげられることなく、一切のものに至り届くがゆえに、無碍光という。

現代語化をめぐる

親鸞は、この部分の解説文を「貪愛瞋憎のくもきりに信心はおおわれるれども、往生にさわりあるべからずとしるべしとなり」と結んでいる。なぜ、貪愛瞋憎の雲霧によつて信心が覆われていても、往生にさまたげがあるはずはないと言いつけるのだろうか。それはやはり、無碍光仏（阿弥陀仏）の摂取不捨の光明と真實信心という天とが完全に一致しているということにあり、その信心が今この我が身の上に実現している。その一点に、親鸞は「往生」の成立を見定めているからなのだと思う。親鸞は、晩年の著作『一念多念文意』において、「即得往生」について注釈している。「真實信心をうれば、すなわち、無碍光仏の御ころのうちに摂取して、すてた

ていると知ることができるはずだというのである。「已能雖破無明闇」というのは、この意味である。信心を獲得すると夜明けになるようなものだと、知ることができるはずである。「貪愛瞋憎之雲霧 常覆真實信心天」というのは、私たちが抱える貪りや愛着、怒りや憎しみを雲や霧にたとえて、それらが常に信心という天に広がり覆っている。つまり、貪欲・瞋恚という煩惱は、絶えずわき起こり、なくなることはないのだと知っておくべきである。「譬如日月覆雲霧 雲霧之下明無闇」というのは、太陽や月が雲や霧に覆われていても、暗闇は晴れていて、雲や霧の下は明るいというようなものである。無碍光仏の光明と真實信心という天とは相応している。その信心は、今この我が身の上に実現する。だから、貪りや愛着、怒りや憎しみという雲や霧によつて信心は覆われていても、浄土に生まれて生きること、に、さまたげがあるはずはないと知っておくべきだということである。

まわざるなり」「おさめとりたまつとき、すなわち、とき・日をもへだてず、正定聚のくらいにつきさだまるを、往生をうとはのたまえるなり」（東本願寺出版『真宗聖典』〔以下、『聖典』〕初版五三三頁、第二版六五四～六五五頁）と、「往生を得る」という意を端的に押さえている。

この銘文にある「真實信心天」、「信心の天」という言葉は、親鸞の特徴的な表現であると思われる。親鸞が記す「真實信心天」という表現は、信心は本来、むこう側・如来の側に属するという位置をあらわしているのではないだろうか。それはまた、「本願力回向の信心」（『聖典』初版二四〇頁、第二版二七三頁）と示されるように、むこう側・法の側からこちら側・機の側に成就するはたら

きを持つているということなのではないか。よつて、それは単に固定的に、むこう側とこちら側を分けるという、二元論的な考え方で了解できるものではないと思われる。そついつた位置を踏まえて改めて、真實信心を獲得することを通して、阿弥陀仏の摂取不捨の光明によつて、我が身と我が身の生きる場全体が、照らされ包まれているということに目覚める。そのこと以外に真の意味での「往生」はないということであろう。そのように阿弥陀仏の浄土に生まれて、その浄土を根拠として生きる。すなわち、自と他が互いに背き合い苦しめ合う、今この現実を担って生き抜く姿勢を、親鸞はここで教え伝えてくださっているのだと受け取りたい。

問題提起

「正信偈」の銘文の四回目、親鸞が「摂取心光常照護 已能雖破無明闇 貪愛瞋憎之雲霧 常覆真信心 天譬如日光覆雲霧 雲霧之下明無闇」という六句を解説した部分に焦点を当てる。ここでは、親鸞の『尊号真像銘文』末巻を貫くテーマの一つだと思われる「闇と光」、そして「雲霧」という譬喩表現に着目し、その内実と位置を説明していくことを課題とする。

まず初めの二句、「摂取心光常照護 已能雖破無明闇」について、親鸞は「信心をうればあかつきになるがごとしとしるべし」と押さえている。この「無明」とは、真実が見えないという人間存在の根源的な暗さ、煩惱の一番本にあるものであると受けとめた。その「無明」という暗闇は、無碍光仏（阿弥陀仏）の摂取不捨の光明に照らされていることに目覚める、すなわち真信心の獲得によって破られる。そのことはつまり、本願真実に出遇い、我が身の迷い

の在り方がありありと見えるという、機の深信の意をあらわしているのであろう。その「あかつき」という言葉は、直前まで暗かったところに明るみが来ている、本当に夜が明けたという実感をあらわす表現であると思われる。

次に中間の二句、「貪愛瞋憎之雲霧 常覆真信心 天」について、親鸞は「われらが貪愛瞋憎をくもきりにたえて、つねに信心の天におおえるなりとしるべし」と解説する。ここは、夜が明けた、すなわち信心を獲得したということによって、「無明」という暗闇が晴れ、それに伴い「貪欲・瞋恚」の煩惱が明瞭になってきたという、自覚をあらわしているのであろう。ただそれが「くもきり」と表現されているように、私たちの内より絶えずわき起こってくる貪り・怒り、憎しみという煩惱に目の前が覆われて、時に自身の本当になすべきことを見失い、不安や苦しみに陥るといふこともあるにちがいない。

しかしながら、終わりの二句、「譬如日光覆雲霧 雲霧之下明無闇」を受けて、親鸞は「やみはれて、くもきりのしたあきらかなるがごとく」と記す。なぜ、「くもきり」の下が明るいと言えるのだろうか。それは、無碍光仏の摂取不捨の光明と真信心の天とが結びついていて、その信心が、今この我が身の上に実現している。要するに、天における光と同じ質の光が差し込んで来ているから、そこは明るいと言えるのである。つまり、我が身にどれだけ深い貪瞋煩惱を抱えていようと、心の内側はたえず曇っていたとしても、それとは次元が異なる、如来との呼応関係によって成立する信心は、我が身と他者とが生きる場全体を、常に明るく照らし出している。そのことを心にとどめておきなさいという、親鸞からの呼びかけであると受けとめたい。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 菊池弘宣）

【原文】

和朝愚禿釈の親鸞が『正信偈』の文

「本願名号正定業 至心信楽願為因 成等覚証大涅槃 必至滅度願成就 如来所以興出世 唯説弥陀本願海 五濁惡時群生海 応信如来如实言 能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃 凡聖逆誘齊回入 如衆水入海一味 摂取心光常照護 已能雖破無明闇 貪愛瞋憎之雲霧 常覆真信心 天譬如日光覆雲霧 雲霧之下明無闇 獲信見敬得大慶 即横超截五惡趣」文

（中略）※中略部分は『親鸞仏教センター通信』第八十八、八十九、九十号に掲載

【現代語】

「和国」の愚禿釈の親鸞の『正信偈』の文 ※銘文の全文は略する。

（中略）※原文参照

「摂取心光常照護」というのは、信心を獲得している人をこそ、無碍光仏（阿弥陀仏）の慈悲の心よりあらわれる光明が、常に照らしてお護りになる。だから、「無明」すなわち、真実が見えない愚かさという暗闇は晴れ、「生死」という迷いの苦しみの長い夜も、もはや夜明けになっ

「近現代の真宗をめぐる人々」第23回 (野村^{よしべえ}芳兵衛 [1896～1986])

大正新教育の象徴として名高い「池袋児童の村小学校」は、昭和前期、まだそれほど宅地化が進んでいなかった東京・池袋郊外で、短命ながらも、豊かな実践を数多く生み出した。この場所で生徒たちと全面的にふれ合いながら研鑽を積んだ教師たちのなかでも、野村はひとときわ独特の思想を展開したことで知られる。その独創性を下支えしていたのは、念仏の生活であった。

野村においては、教育と宗教は初めから分離していない。「学級経営」という技術論的な語りのなかにも、「本願」、「如来」、「信」といった親鸞の言葉がたびたび姿を見させている。彼にとって教育はほとんど生活と同義であり、そのなかの特殊な一領域として切り出されていない。これは当時影響力のあった教育者ペスタロッチの自然教育的な理念が反映されたものだが、その基底にあるのは、郷里の洞戸^{ほらど}で母や父と共に念仏したときの光景である。美濃地方中部の西端、板取川沿いのこの小さな集落で、彼は貧しい農家の暮らしを、南無阿弥陀仏を口にし、また耳にしながら生きていた。

初期の野村は、自身の教育理念を「生命信順」という言葉に要約する。端的には、大いなる生命に身を委ねて生きることを意味しており、しばしば親鸞思想を生命哲学の視座から解釈したものと説明されるが、この言葉の奥行きを知るためには、彼がこれを「合唱」と言い換えていることに注目しなければならない。教育とは、教師と生徒が、その周りの存在が、最終的には万人が、合唱し、その音が一つ一つはっきりと響きながら、協力しようとする意志、あるいは愛のなかで一つの全体として響き渡ることである。このような意味での教育は、上から指導する(叱る)のでもなく、ただ個性を伸ばす(褒める)のでもなく、むしろ「同行しよう」と呼びかけることである。野村は、このような道を進む者を「念仏の行者」と呼ぶ。

(徳田 安津樹)

『野村芳兵衛著作集 1』
(黎明書房、1974年)

人事異動の報告 (2025年3月～4月)

着任

研究員 ^{いそべ みき}磯部 美紀 (2025年4月1日付)

新潟県出身。京都府立大学公共政策学部福祉社会学科卒業。大谷大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程修了。大谷大学真宗総合研究所東京分室PD研究員を経て現在に至る。博士(文学)。日本体育大学・関東学院大学・跡見学園女子大学、各非常勤講師。近年の論文に、「現代日本における僧侶役割の揺らぎと模索」(『宗教と社会』第29号、2023年)、「弔いにおける死者と生者—『客体に留まらない死者』を視点に—」(『哲学論集』第69号、2023年)など。

嘱託研究員 ^{まつおか じゅんじ}松岡 淳爾 (2025年4月1日付)

長崎県出身。九州大学文学部インド哲学史分野卒業。大谷大学大学院文学研究科博士後期課程修了。大谷大学任期制助教を経て現在に至る。近年の論文に、「『大般涅槃經要文』表紙裏に記述された六味の意図——「業報差別」・「大般涅槃」との関係性から読み解く——」(『真宗研究』第69輯、2025年)、「信心すなわち仏性」の論理に基づく「涅槃の真因」の意義(『親鸞教学』第117号、2023年)など。

再任 (2025年4月1日付)

嘱託研究員 長谷川 琢哉
嘱託研究員 伊 藤 真
嘱託研究員 宮 部 峻
嘱託研究員 繁 田 真爾

再任(兼任) (2025年4月1日付)

嘱託研究員 中村 玲太
嘱託研究員 青柳 英司

上記2名は真宗大谷派教学研究所と兼務。

離任 (2025年3月31日付)

嘱託研究員 田村 晃徳
嘱託研究員 飯島 孝良